



<センター通信 3月号>

～スペインかぜと第一次世界大戦～

中津川市地域総合医療センター 稲垣 大輔

3月になりましたが、この地域ではまだインフルエンザに罹る人がいます。体調管理にどうぞお気をつけください。

インフルエンザという病気は、たびたび世界規模の大流行をおこしてきました。パンデミックという言いかたもあります。

今回は、そのひとつである「スペインかぜ」のお話をします。



1918年から1920年にかけて、スペインかぜは世界中で大流行しました。スペインかぜによって、4000万人から5000万人が死亡したとみられています。感染者は6億人にのぼりました。当時の世界人口は18～19億人ぐらいだったといわれていますから、およそ3人に1人がスペインかぜにかかった計算になります。

日本の書物などでは通例「スペインかぜ」と書かれていることが多いのですが、正しくはかぜ(風邪)ではなく、インフルエンザです。

また、当時スペインでも流行したことは事実であるものの、始まったのはスペインではなくアメリカからです。

私じしんもまったくの不勉強で、てっきりスペインから流行したものとばかり思っていました。ほんとうに知らないとは恐ろしいものですね。

さらに、以下のような指摘まであります——

「まさに同じ頃戦われた第一次世界大戦の戦死者は約1000万人といわれている。スペイン・インフルエンザは、実にその数倍の命を奪ったのである。これは20世紀最大の人的被害であり、記録のある限り人類の歴史始まって以来最大でもある」(速水[1])

「第一次世界大戦はなぜ終わったのか。実は敵味方、みんなスペイン風邪にかかってバタバタと倒れてしまい、戦争を続けることができなくなってしまったからです」(池上[2])

ようするに、「スペインかぜが第一次世界大戦を終わらせた」という見解です。(これにはびっくりして、高校の教科書や参考書を数冊めくってみました。が、そもそもスペインかぜが載っていないようでした)



このように、人間と病気の関係は切っても切れないほど密接であり、ときには世界史のなかでも大きな意味をもつ場合があります。

参考文献

- [1] 速水融『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ——人類とウイルスの第一次世界戦争』(藤原書店、2006年)
- [2] 池上彰『おとなの教養——私たちはどこから来て、どこへ行くのか?』(NHK出版、2014年)